522
講談社現代新書

だれもが書ける文章

「自分史のすすめ

じぶん

橋本義夫

〈事実を記録することから始めよう。
国語辞典、日本史年表、地図帳の三つを用意して、
自分の生きた道すじを、ふだん使っている言葉で、
地理的・歴史的に書くことから始めよう〉
著者は、二十年以上にわたって、
美文・名文にこだわらぬ、
だれもが書ける文章作法を提唱して、
日本全国に〝みんなの文章〟運動を起こしてきた。
その経験にうらうちされた本書は、文章と縁のなかった人々
だれにも書く勇気を与え、何をどのように書けばよいかを、
わからせてくれるユニークな実践文章論である。

だれもが書ける文章
昭和五三年一〇月二〇日第一刷発行　昭和五九年六月二〇日第八刷発行
定価——四五〇円
著者——橋本義夫
©Yoshio Hashimoto 1978 Printed in Japan
発行者——加藤勝久　発行所——株式会社講談社
東京都文京区音羽二—一三—三二　郵便番号一二三　電話〇三—九四五—一二一一　振替東京八—三九三〇
装幀者——杉浦康平＋鈴木一誌
印刷所——凸版印刷株式会社　製本所——株式会社大進堂
ISBN 4-06-145522-2 (2)
落丁本・乱丁本は、小社書籍製作部宛にお送りください。
送料小社負担にてお取り替えいたします。(学1)

だれもが書ける文章

「自分史」のすすめ

講談社現代新書

まえがき

万人の文章とは、教師の指導を金科玉条とし、古風なしきたりに従って、同じことを、同じ言葉で、同じ筆法で、切ってそろえたようなことを書く文章のことではない。各種の経歴をもった職業人が、あらゆる場所、あらゆる条件の中で、自分の大脳に記録していることや、実践、見聞を、自分の言葉で、正直に、そのまま書くことである。

そして、もう一つの要素は、文章が、今日明日の人にわかればよいということである。

今までは、私の経験でいっても、みんなはだいたいにおいて、自分の職業や生活を卑下し、上層といわれる人の言葉、理屈、方法だけが、模範であり、文化であり、値打ちがあると思い込まされ、それを真似ることにつとめてきた。

りの理由と、時代の必要もあったのであるが、文明もここまで高度の段階にくると、みんなは、自分の生活、体験、思考などを、自分の言葉で書き、自分の文章をつくる時代に入ったのである。

万人、みんなそれぞれ生活という、自分たちの労働着をもっている。またその下には、だれ

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

でもほとんど同じ人間性がある。この労働着と人間性を、自分で書き、それを文章にするのが「ふだん記」である。

それを私たちは目標とし、大脳に録音してあることや、実際社会の実状を、年表と、地図の上にのせて書くことを、みんなで試み、実践してきたのである。

今まで各種の技術が教えられてきたが、そのほとんどは教師と受講生にわけて、「指導」といった形の上意下達式であった。

しかし私たちの具体的方法は、そうではない。「私でもできるんだから、だれでもできる」「下手に書きなさい」といった調子で、みんなにスタートさせ、好ませ、喜びつつ実行させ、模範や枠は、ごく初歩以外は避けるようにしてきた。

幸にも、それらがほぼ社会の必要性に一致したらしい。まったくの無名な、無力な、庶民自体の、こうした平凡な試みが、ほとんど自然発生的といってもいいような調子で、だんだんに伸び拡がっていったのである。

この本は、「万人の文章」のために生れたものであるから、万人を卑しむ人や、自分だけ偉くなりたがる人とか、既成の枠を不動と思い込んでいる人々には、何の益にもならないであろう。

またこの本は、「ふだん記」の多くの文友の協力によって、つくられたものでもある。このような形にまとめられるにあたっては、講談社学芸第一出版部の守屋龍一氏に、たいへん御世話になった。心から感謝申しあげたい。

一九七八年九月二五日

橋本義夫

目次

まえがき――3
1―私でも書ける、書けないものなし――8
2―いま必要な庶民の文章――20
3―名文・美文を手本にするな――30
4―下手でもよい、まず書こう――48
5―何を書けばよいか――60
6―どのように書くか――76

7—文章は手紙にはじまる——90
8—『自分史』を書きなさい——106
9—庶民の生活が文章になる——132
10—老人の話を文章に——154
11—だれでも本がつくれる——164
ある常民の足跡——橋本義夫論——色川大吉——171
付録1　文章を書くための身辺年表——180
付録2　「ふだん記」グループ住所録——192

1――私でも書ける、書けないものなし

告白

私は明治三十五年（一九〇二）、多摩地方の一農村に生まれた。自慢でも何でもないが、母親の言葉によると私は「安産で世話のいらぬ児で、泣かずいきばっていた。小ちゃい時から大きいことが好きだった。お祝（七歳）のときには強飯をセイロでふかすんだ（普通早ぶかしといって曲物でふかし、もちつきの時にはセイロを使う）といっていたが、その通りになったよ。またお前はよく大きな夢をみた」ということだった。だが、生来不器用、才能といったものにもまったく恵まれず、平凡そのものであった。

人真似することすら満足にできなかった。明治四十一年に小学校へあがったが、学校とは肌が合わず、教科書（とくほん）も先生も学校自体もみな嫌いで、手をあげたことも、競争したこともない。

賞められたこともない。餓鬼大将になったことも、弱い者いじめをしたこともない。

当時、家で新聞をとっていた。私は「読本」をみると、嫌悪感が湧いて、読む意欲さえも持たなかったが、不思議に新聞だけは好んで読んだ。後で気がついたが、私の学校、私の教科書は『新聞』であった。学歴といえば、新聞を読んだことというのが本当であろう。

そんなわけで私のやった今までの小さな仕事といえば、だいたいにおいて自分の小体験（実験ともいえる）を基礎にして事を始め、それを伸ばすようにしただけであった。だから私が何かの文を書くことになると、まず「告白」から始めるのは避けられない。

私はまったくの無能者であるが、夢を見る癖がある。母が言ったように、私は大きな夢をみるのが性癖であった。しかし大きな夢をみても、現実には無能者であるという大きいひらきが、青年期には劣等感や絶望感を生み出した。それが長い間に厭世感とつながり、憂うつの人生をすごすようになった。

読ませよう二十二年

小学校の当時私は、あの教科書（とくほん）を手にすると、威圧されるような気がして教科書が嫌いになった。しかし新聞は読んだので、幸い活字そのものが嫌いになることはなかった。十六歳頃（青

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

年期）ふとしたチャンスから、教科書以外の本を手にした時、その中身の暖かさ、面白さ、生き生きしたことに圧倒された。本にはすごく面白いものがあり、いいもののあることを知って驚き、それから読書を好むようになった。うすっぺらな本の中にも、つきせぬ情もあり、真理もあり、役立つことがある。それは大正半ばの頃のことであった。

私はたいへんな晩智恵であるが、ためしたことでないと承認しない癖がある。またためしてわかったことは、自分の独り占めにしないというのが、私の生来の癖であった。

その頃、私たちの住んでいた農村では、生活文化が低く、一ヵ村(私の生まれた八王子の川口村は大正十年、戸数七一〇、人口四七六六、当時東京府南多摩郡の一ヵ村はこの前後)でも、新聞購読者は二十軒ほどで、教科書以外は九星の暦ぐらいしか読まず、本らしき本を読む者は、全村でも十人に満たなかった。

私は、大正十三年、知識才能の宝庫ともいうべき書籍を、村の若者に読ませる運動を起こし、『教育の家』と名づけ、ゆくゆくは農村図書館をつくろうとした。近村の若者まで集まって来て、活発な動きが起こった。

昭和二年金融大恐慌が起こり、不景気のため八王子の書店も不如意となって、注文の本が来なくなった。そこで「町に出て書店を開き、青年教育文化運動をやろう」と決心し、鍬と鎌を

捨て甲州街道八王子の町に出て、書店「揺籃社」を始めた。開店は昭和三年一月六日であった。今から五十年前のことである。しかしこの運動も戦災により、約二十年間で幕を閉じねばならなかった。時に私は四十三歳だった。

書かせよう二十二年

それからは実践運動の失敗やらで、戦災による焼残りの本で勉強しているうちに、五十歳になった。当時はまだ「人生五十年」といわれていた頃なので、私もいよいよ先が短いと考え、死ぬ前に今まで通ってきた道を、書いておこうと思うようになっていた。

それまでは文章を書く能力など、まったくないものと諦めていた私だったが、死ぬ前に自身のことをかいた文章を残そうといった、切羽つまった気持から実行に移したのだった。これには五年を要したが、ここで気のついたことは、文章は言葉と同じに、くりかえしにより会得できる技術で、習慣となればだれでも書けるということがわかった。

「名文、美文など模範にして劣等感をもたせ、文章を書くことなど不可能と思い込ませることは、大まちがいだ！　万人に文章を書かせよう」。私はこの運動を始めるにあたり、その母体を「ふだん記の会」と名づけて発足させたのである。

その昭和三十二年より今日までの二十年、そしてその後半の十年は特に本格的にこの運動に力を傾けた。

「読む運動」を二十二歳で始め、「書く運動」を五十五歳で始め、「ふだん記」としていくらか知られるようになった時には、私はすでに七十台の半ばをすぎた老人となっていた。

「ふだん記」の仲間たち

自分だけの探求として、書き置きを書くつもりの数年間は、前を向いているのか止っているのかわからず、まったく孤独な道であった。

「私でさえも文章が書ける、書き始めたらくり返せばだれでも書ける」。これが本当にわかってからは、もう孤独ではないはずであった。友人たちや、家庭の主婦たちに文章を書くことをすすめた。だが結局わずか数人の主婦だけが、私のいうことを聞いて試みるだけだった。昭和三十五年、すごい貧乏の中を一銭にもならぬボタ山のような文章を書き、パンフレット「平凡人の文章」をつくって、「ふだん記」への参加を熱心にすすめて歩いた。だが名もない貧乏人のいうことなどにはほとんど従うものがなかった。

やっと集めた主婦の作文をまとめ、『多摩婦人文集』と名づけ、この一冊をもってこの運動

も終わりにしようとしたのが、昭和四十二年の十二月、これがお別れと思いながら、私は寺町の本立寺でその文集の出版記念会を開き、友人やゲストを招いた。

その会を終えた帰路、この「書く運動」もこれまでとは思ったが、それでもと思い、「だれか謄写版で『ふだん記』をつくってくれる人はありませんか」と、散って行く人々に語りかけてみた。最後の望みをこめた私の言葉に、「私がやってみましょう」と応えたのは、この日のゲストの一人、主婦の四宮さつきさんであった。

昭和四十三年一月、無名の主婦数人が家事の合間を割き、できればいい、わかればいい式でつくった結果、本当に不格好なガリ版刷り、わら半紙三十ページの『ふだん記』五十部ができた。これが続くなどと思う人はだれ一人いない。だから表紙に番号さえもなかった。そんな機関紙でも「発刊のことば」だけは立派だった。

「人類の勝利の大きな原因の一つは、万人が言語を持つことであった。だがその勝利を決定的なものにしたのは、文字とその組合せの文章を持つことであった。文章は長い間は極少の支配者と、彼らに仕える文章職人のものであった。

だが本来、言葉の延長たる文章は、人類文化の進歩に伴い、言語が万人のものである如くに、文字文章もまた万人のものでなければならない。このためには発表機関も万人に門を開い

ていなければならぬ。それを試み、それをつくろう。

言語も文章も共に社会の習慣、つまりくり返しの技術である。これはくり返しと積上げの第一歩である。大きい仕事はかくして築かれてゆく。われわれの一九六八年はここから始まる。その勝利は必至である」（『ふだん記』一号）

さらにこの年、この運動を進めようと「みんなの文章」を印刷した。その中に私は「十八年間の努力から生れたこの小冊子一つ……。これはボタ山の上に咲いた一輪の野の花である」と書いた。これも多くの人々に進呈したがもちろん反響はなかった。

「この冊子をもっとも多く読んだのは、筆者の私だろう。（中略）とに角、筆者が面白がって何回も読んだのだから悔いはない」（一九六八・九・一一の日記）

窮して通じる

「万人の文章、万人自身の本」などと、途方もない大きな題目は掲げてみたものの、この運動の実行にあたっては、顕微鏡で探しても見つからぬほどの、微視的な存在から始めざるを得なかった。

有名な、著名な指導者も道案内もいなかった。万一いたら既成の枠にはまるか、流行の真似

事で立ち枯れたであろう。財閥や金持ちといえる援助先もなし、国家とか官公の補助なども、ビタ一文なくここまできた。真似るべきものがない、手さぐりで道を探してゆく、会則も会費も決める時がなかった。万人の書ける文章、出せる本は既成の枠でなく「探求ありて指導なし」であった。

元来、見世物本位の文章などを、万人の書く文章に持込むのはできない相談というものだ。「ハガキから出発」「競争しない」「新人優先」「金銭の多少に左右されぬ」「非年功的」「手紙は拙速」「下手に書きなさい」「その土地よかれ、その人よかれ」などなど、それらは必要と無力が産んだ方法であった。

私たちは研究所で実例見本をつくるように、こつこつと「ふだん記」の実例をつくって示すことにした。その実験例によると、家庭主婦たちが「ふだん記」運動の主力をなしている。これは明日の文明社会の方向を示唆している。とくに三十代の家庭婦人の活発さは人類文化に明るさを投げるようだ。

「ふだん記」と老人

私は現在七十も半ばを越えた年齢であるが、実際のところ現役である。毎日必ず自転車に乗

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com